＜書評＞

佐伯眞人他編著『生徒の心を揺さぶる社会科教材の開発』

若生　剛

中学校社会科は平成15年12月26日の学習指導要領一部改正によりひとつの転機を迎えた。指導計画の作成と内容の取扱いについて，新たに「すべての生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり，学校において特に必要がある場合には，この事項にかかわらず指導することができる」との文言が加えられ，これにより各学校での裁量が大幅に認められることとなった。

評者が日頃耳にした話であるが，ある中学校では進学実績に重点を置いているため，限られた時数の中で知識を網羅的に取り扱おうとするあまり無味乾燥な知識注入に傾斜してしまっているという。またある中学校では生徒の主体的な学習を尊重し課題を解決する能力を培うことに学習の重点を置いているため，教科書で取り扱われている以外の多様な事柄・事象についてのイメージが乏しいといった状況が発生しているという。いずれの場合でも中学校社会科の最終目標を高等学校での地理歴史科や公民科につながる基礎・基本を身につけることに置いているという点では一致しているのであるが，学習成果としての豊富な知識・資料活用技能と授業の面白さとの両方を追究しつつも，指導内容の厳選と多様な学習活動とのバランスに苦悩しているようである。実際に毎日教壇に立っている社会科教師には同様の悩みを抱えている方も多いのではないだろうか。

本書は，そのような状況にある今日の中学校社会科に対して多くの示唆を与えてくれる格好の書であると言えよう。

編者である佐伯眞人氏は，まず冒頭で次のように問題提起している。

「数年来学力の低下が社会問題化している。中学校の社会科においても基礎的な知識が身に付いていない生徒が多いと言われる。（中略）しかし，これを解決するためにはやみくもに知識を注入する学習をすればよいということではない。基本的には生徒の学習意欲を喚起することが大切であり，それが豊かな知識や考える力を育てることになる。改善に向けては様々な問題があるが，いずれにせよ教師の授業に対する姿勢が大切であることは間違いない。社会科の学習で考えた場合，その基本には教材開発や教材の発掘がある。それへの取り組みが，生徒の心を揺さぶり，学習への関心を深め，確かな学力に結び付いていくことになると考える。」（はしがきより）

このような問題意識のもとに，中学校や高等学校で豊富な経験を持つ10名の執筆者が理論面と実践面の両方から社会科教材の開発について提案をしている。

第1章では，編者である澁澤文隆，佐伯眞人，堀井登志喜の3氏がそれぞれの専門分野である地理，歴史，公民の教材論を展開している。地理的分野における教材の発掘・開発のポイントとして澁澤氏は，①イメージを正す，イメージをつくる，②読解力を鍛える，③古くなった教科書を生かす，④帰納法的なアプローチを生かす，の4点を指摘する。写真一つとっても隅々までよく観察すると様々な背景が浮かび上がってくることや，時差を等時帯の地図から読み取ることと経度差から計算することとの違いなどについて鋭く切り込んでいる。歴史的分野について，佐伯氏は2000年に明らかになった旧石器遺跡発掘の捏造事件を手がかりとしながら，歴史が資料によって叙述されるものであるという性質を確認し，その上で，歴史的な思考を育てるためには扱う資料が確かなものであるかどうかをよく吟味し，資料について多角的な見方を身につけさせることが大切であると説いている。また，教材の発掘・開発への心構えとして，①授業で使えそうなものはないかと日頃から関心をもち収拾した資料をよく整理しておく

こと，②常に学会の最先端の研究動向や地域史の研究成果に関心をもつこと，③交流の輪を広げそれぞれの得手の分野について情報を提供し合うことで多くの人の視野を活用すること，の３点を指摘している。堀井氏は，社会科の目指すところを「地理や歴史の知見や思考力との有機的関連に立つ公民分野の学習を通じて，現代社会の認識とそこに生きる一員としての公民的資質を培うこと」であると３分野の関係性を述べている。その上で，社会科は現在から未来に向けての外界の認識と社会的存在としての自己認識であり，その中に指向性，当為性を含む一種の価値教育という性格を内在していると指摘している。そして，そこで用いられる教材とは現実の社会や世界と自分たちとの通路たるものでなければならないとしている。

第２章では，社会科指導の実際における教材開発例，授業例として10編が紹介されている。第１節では，「教科書を用いた教材の開発と授業実践」と題して，現行教科書の記述分析に基づいた４つの授業展開例を示している。例えば「歴史における『力』を追究し続ける学習」（関谷文宏氏）では，教科書に書かれた「力」とは具体的にどのようなことができる能力のことを指しているのかという疑問を出発点として，各時代の記述を丹念に追いかけている。そして，織田信長の「力」であれば，軍事力（攻撃力・防御力・戦術など）と経済力が核となりながら，権威，団結力，組織力，構想力などが深く関わっていることを読み取っている。ややもすると無批判に，または機械的になぞってしまいがちな教科書であるが，そこに掲載された文字資料・写真資料・統計資料等を丁寧に吟味することで，最初に一読したときに得た認識が大きく揺さぶられるような発見をすることができる。この節では「教科書の読ませ方」を教えることの大切さが見えてくる。

第２節では，「新たな教材の開発と授業構想」という題目のもと，６つの授業が紹介されている。地理的分野では，ゲーム教材（カルタ）を用いた国名知識の拡充・定着，数学・理科の学習状況を踏まえた地球上の位置の表し方や時差の扱い方の指導方法，略地図の描画方法を指導することの意味について論じられている。歴史的分野では，「結論が先に来る」形での指導から始める学習の深化と発展，構築主義に基づいた文化学習創造の試み，読解力の向上に資するクリティカル・リーディングの必要性について論じられている。公民的分野では，経済教育や金融教育に先立つ「お金」の学習について論じられている。例えば「『お金』に焦点を当てた経済の導入単元」（館潤二氏）では，吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』や各自が作成する「私の経済の循環図」により，経済循環を，教科書に図示された「経済の三主体」（家計・企業・政府）のような単純で抽象的なものではなく，「私」自身が関わる具体的なものとして捉えさせている。また「お金」そのものを教材化することで，紙幣に支えられた生活と国の政治・財政の安定との関わりについて認識させている。この節で紹介された授業はいずれも既成の展開にとらわれず，ダイナミックな発想を感じさせられる。

本書の趣旨を考えたとき，朝倉啓爾氏が紹介している故・谷口五男氏の「生徒のことは生徒に聴け。」，澁澤文隆氏の「学習指導要領は先生を教室の入口まで連れて行くが，教室の中で行われる授業は先生と生徒が一緒になって創るものである。」（いずれも88ページ）という言葉は非常に含蓄が深く，印象的であった。授業とは，教師による発表会やショーではなく，生徒の現状から出発するものであるということを肝に銘じ，創意工夫を凝らした教材開発・授業実践に日々取り組んでいきたい。

佐伯眞人・澁澤文隆・堀井登志喜編著『生徒の心を揺さぶる社会科教材の開発』（三晃書房，2006年，144ページ，2,381円＋税）

水戸英宏中学校　　若生　剛